あの島のどこかに埋もれているかと
思いますと無性に行ってみたくぞんじます。

乙飛十六期　大木　登史
母　大木　雪枝（横浜）

先日はわざわざお電話くださいまして有りがとうございました。私も寄る年波で皆さまの足手まといと存じますので残念ながらお伴できませんが、心の内では是非とも参りたく存じました。はるばる遠方より悲しい土石をお届けくださいまして誠に有りがたく、じっと手にして又〻当時の想い出に胸も切なくなるのでございます。早速遺骨のない石碑の下に埋めることにいたしました。

御書面拝見いたしますにつれ二十年前の事ですが、今また昨日のように想い出されて涙新たでございます。空中にての戦死とのみ思っておりましたのに地上にて、まして硫黄島の、あの島の姿が変わる程の激戦に加わっていたのかと、今更あの悲痛の想い出に胸も痛むのでございます。今まであの子の遺骨はないものと思って居りましたが、あの島のどこかに埋もれているかと思いますと無性に行ってみたくぞんじます。でも、我が子だけではない、ほんとに運が悪かったのだ。今更どう思っても仕方がないと今一度あきらめることにいたしました。お陰様で登史の最後の様がはっきりわかりましてほんとうにありがとうございました。深くお礼申し上げます。・・・下略・・・

（昭和四十二年十二月二十六日号掲載）